

17. ガリウムシンチグラフィで原発および転移巣に著明な異常集積を認めた巨大耳下腺腫瘍の一例

石川恵美子 外山 宏 駒井 哲之
藤原 道明 加藤 良一 藤原 寿照
藤井 直子 高橋 正樹 古賀 佑彦

(藤田保衛大・医・放)

桜井 一生 岩田 重信 (同・医・耳鼻)
江尻 和隆 前田 寿登 竹内 昭

(同・衛・診放技)

症例：50歳女性。主訴：左頸部腫脹と疼痛。現病歴：約15年前より耳下腺腫瘍を有し悪性変化を認めた。Gaシンチ所見は左側頸部～鎖骨上窩の原発巣に、広範に腫瘍状の著明な異常集積を認め、左上外側前胸部と右鎖骨上窩の異常集積は、皮膚転移と考え、右後～側頸部への異常集積は、リンパ節転移あるいは皮膚転移への集積と考えられた。耳下部の急に増大した頸部腫瘍に、Gaシンチで著明な異常集積を認めた場合、耳下腺由来腺癌も考慮すべきで、転移巣の検索にも有用と考えられた。

18. 甲状腺癌の¹³¹I治療；Ablation of Residual Thyroid Tissue

道岸 隆敏 横山 邦彦 市川 聡裕
宮内 勉 久慈 一英 絹谷 啓子
絹谷 清剛 隅屋 寿 滝 淳一
中嶋 憲一 利波 紀久 久田 欣一

(金沢大・核)

甲状腺癌全摘術後の患者71例に¹³¹I治療を施行した。治療量にて69例(97%)に甲状腺床の集積を認めた。うち56例(81%)は1回(平均3,759 MBq)の投与にて、13例は2回以上の投与にて甲状腺床の集積が消失した。Tg抗体は17例(24%)に陽性であり、18例がTg<10 ng/ml、36例が10 ng/mlであった。Tg<10 ng/mlである例は全例1回の投与にて甲状腺床の集積が消失した。

19. 高解像²⁰¹Tl SPECTによる乳腺腫瘍の評価

藍山 昌成 瀬戸 光 清水 正司
神前 祐一 永吉 俊朗 呉 翼偉
柿下 正雄 (富山医薬大・放)

乳癌患者14名を対象に、高解像²⁰¹Tl SPECTを施行し、Planar像と比較した。SPECTでの検出率は、85.7%、Planar像での検出率は、57.1%と、従来の報告に比べて低くなったが、本対象には、腫瘍最大径1 cm以下の腫瘍が4例、1～2 cmの腫瘍が5例と、高率に小腫瘍が含まれており、このことを考慮すれば、決して従来の報告に劣るものではなく、かつ、このような対象において、SPECTの85.7%という検出率は、きわめて高いものと思われた。特に、腫瘍核出術後の残存を指摘できた例がSPECTで2例あり、今後、術後の再評価や、follow upにも、²⁰¹Tl SPECTが、有用であると考えられた。

20. ²⁰¹Tlシンチグラフィによる骨軟部悪性腫瘍の評価：MRIとの比較

多上 智康 松下 智人 松村 要
竹田 寛 北野外紀雄 中川 毅

(三重大・放)

近年、骨軟部悪性腫瘍の化学療法の効果判定に²⁰¹Tlシンチグラフィの有用性が報告されている。われわれは、MRI dynamic studyにより腫瘍血流の評価も試みており、両者の比較検討を行った。大部分の症例で、MRI dynamic studyによる腫瘍の血流量が多いほどTlの集積が高い傾向がみられた。しかし、腫瘍sizeが大きく壊死を伴う症例では、血流が少ないにも関わらずTlの強い集積を認めた。腫瘍sizeおよび壊死の存在によりTlの集積動態が異なることが考えられ、このような腫瘍での²⁰¹Tlシンチグラフィによる化学療法効果判定には注意を要すると思われた。